

他者志向的達成動機と自己志向的達成動機 の関係性に対するパーソン志向的アプローチ ——階層的クラスター分析と潜在カテゴリー分析による検討——

伊藤忠弘

問題と目的

スポーツを含む様々な領域で優れた達成を成し遂げた人は「支えてくれた人に対して感謝したい」という言葉を口にする。またこれから達成状況に臨む人も、支えてくれる人や応援してくれる人に「恩返ししたい」や「期待に応えたい」といった言葉を口にする。このような言葉が周囲に向けられたリップサービスではなく本心から述べられていたとしても、優れた達成に必要なきつくてしんどい練習や努力に持続的に向かわせるほどの動機づけの源泉に果たしてなっているのだろうか。ボランティアやソーシャル・サポートといった直接他者の支援に向けられるような行動とは異なり、勉強やスポーツは自分自身が目標を設定し、努力し、達成することで喜びや満足感を得るといふ、至って自己志向的な活動と言える。スポーツや芸術活動において結果としてのパフォーマンスが周囲の人々に感動や喜びを与えたとしても、それは副産物であり、達成者はそれ自体を目的に活動しているわけではないと見ることもできる。

2019年3月21日、およそ27年間にわたる現役選手生活から引退する会見を行ったイチロー選手は、ファンの存在の重要なし特別さを次のように語っている。たとえば引退を決意するに至った2019年の開幕シリ

他者志向的達成動機と自己志向的達成動機の関係性に対するパーソン志向的アプローチ（伊藤）

ーズが楽しかったかと訊かれ、「やっぱり、誰かの思いを背負うというのはそれなりに重いことなので、（中略）、凄く疲れました。で、やっぱり1本ヒットを打ちたかったし。応えたいって。当然ですよ、それは。」と語っている。特に注目されるのは、「どんなチームでも、どんな状況でもずっと応援してくれたファンの存在。イチロー選手にとっていかがでしょうか。」という記者の質問に対して、「ある時までは、自分のためにプレーすることがチームのためにもなるし、見てくれてる人も喜んでくれるかなというふうに思っていたんですけど、ニューヨークに行った後ぐらいからですかね。人に喜んでもらえることが一番の喜びに変わってきたんですね。その点で、ファンの方々の存在なくしては、自分のエネルギーはまったく生まれないといいと思います。」と話している。つまりイチロー選手の中では、当初自分が努力し達成することが結果的にファンを含むチームに関わる周囲の人のためになっていると意識していたところから、次第にファンの存在こそが自身の達成を動機づける源泉となり、周りの人を喜ばせることを目的として努力すると意識されるように変化してきたことが語られている（日本スポーツ企画出版社, 2019）。

他者志向的達成動機は「他者からの支援に対する恩返しや期待に応えるという意識によって支えられた動機づけ」として定義される。これは達成者の「自分を支えてくれる家族や仲間のため」、「応援してくれる人の期待に応えるため」といった語りを反映している。真島（1995）は他者志向的動機を、「自己決定的でありながら、同時に人の願いや期待に応えることを自分に課して努力を続ける意欲の姿」と定義した。現在、日本の達成動機づけの心理学的研究でも広く受容されている自己決定理論は、達成行動が自律的になされるか、それとも他律的になされるかという特徴が、達成行動の質に影響を与えることを指摘した。さらに自己決定理論では、外発的動機づけを自己決定性ないし内面化の程度に応じて「外的調整」、「取り入れの調整」、「同一化的調整」、「統合的調整」に分類する連続体モデルを提起した。勉強をする理由として、内発的動機づけ（内発的調整）は「面

他者志向的達成動機と自己志向的達成動機の関係性に対するパーソン志向的アプローチ（伊藤）

白くて楽しいから」、「新しいことを知りたいから」、統合的調整は「自分の能力を高めたいから」、「知識を得ることで幸せになれるから」、同一化的調整は「自分の夢や目標に必要なだから」、「良い高校や大学に入りたいから」という理由と対応できる（外山, 2011）。これらの勉強する理由は自己決定（自律性）の程度の違いとして次元上に付置されている。一方、真島（1995）の他者志向的動機では、スポーツや学業といった達成状況で「周りの人のため」に自身の努力を傾注することを自己決定するという動機づけのあり方を指摘している。「自分のため」と「周りの人のため」の関係づけ方が問題となるという点で、イチロー選手の語った野球への動機づけの源泉に通じるところがある。

他者志向的達成動機の質問紙による測定

他者志向的達成動機はこれまで、大学生を対象にした面接法による調査と心理尺度を利用した質問紙法による関連研究によって研究されてきた。面接調査は、努力を動機づける源泉として、自分を支えてくれる親、友人、教師、コーチからの励ましやアドバイス、あるいは自分を応援してくれる人の存在の重要性を指摘している（伊藤, 2006）。大学生にこれまでの努力経験を回顧させ、それが「自分のため」だったか、「他者のため」だったか、それともその両方だったかを直接尋ねたところ、22%が自分の努力経験を「他者のため」とした。これは「自分のため」と回答した51%に比べると少なかったが、「自分のため」と「他者のため」の両方と回答した大学生が27%おり、これを含めるとおよそ半数の大学生が「他者のため」に努力したと振り返ったことになる（伊藤, 2007a）。

他者志向的達成動機の心理尺度の作成は、達成行動の理由を語る際に用いられる「自分のため」という動機と「他人のため」という動機について思うところを大学生に自由に記述させた内容に基づいている。これを分類し整理した結果、自分のために努力することが重要であるとする記述や、家族や仲間のためと言っても最終的には自分のために努力しているという

他者志向的達成動機と自己志向的達成動機の関係性に対するパーソン志向的アプローチ（伊藤）

記述とともに、誰かのためにと考えた方が努力しやすいといった他者志向的に達成行動に従事しているという記述や、自分のために努力することが同時に他者のためになるという「自分のため」と「他者のため」を同時に志向することをうかがわせる記述が含まれていた（伊藤, 2004）。上記の記述を元に 72 項目からなる尺度を作成し、大学生 227 名に各項目の内容が自分の考えと一致する程度を 6 件法で回答させた。主因子法バリマックス回転による因子分析の結果、①「自分のため」と考えた方が動機づけも高く望ましいとする「自己志向的動機傾向」、②「他者のため」と考えた方が動機づけも高く望ましいとする「他者志向的動機傾向」、③「他者のため」と「自分のため」を区別しない、あるいは相互につながっているとする「動機の統合」、④「他者のため」に頑張ることも究極的には「自分のため」であるとする「自己志向的動機への収束」、⑤「他者のため」と考えるとプレッシャーや責任感を感じるという「他者志向的動機の否定的側面」、⑥「他者のため」と「自分のため」を状況に応じて相互に使い分けるとする「相互補完」の 6 因子が抽出された（伊藤, 2004）。

その後、因子負荷量の高い項目が少なかった「相互補完」を除く 5 つの因子より因子負荷量の高さと内容を吟味して項目を抜粋し、各因子 4 項目計 20 項目からなる「自己・他者志向的動機への態度尺度」（短縮版）を作成したが、研究ごとの探索的因子分析では因子数は 3~5 と安定しなかった（伊藤, 2005; 2007b）。伊藤忠弘・藤井勉・大家まゆみ・上淵寿（2012）は項目を再検討し、語句の表現も修正し、各因子 5 項目計 25 項目からなる「自己・他者志向的達成動機への態度尺度」（改訂版）を作成した。大学生を対象に実施し、探索的因子分析の結果、5 因子の構造が確認された。

クラスター分析に基づく他者志向的動機のあり方

伊藤（2007b）は他者志向的達成動機のあり方、特に自己志向的達成動機との関係の多様性を探索的に検討する目的でクラスター分析を行った。研究 1 では大学生 177 名に「自己・他者志向的動機への態度尺度」（短縮

他者志向的達成動機と自己志向的達成動機の関係性に対するパーソン志向的アプローチ（伊藤版）を実施し、主因子解バリマックス回転による探索的因子分析で5因子解を採用したが、第4因子と第5因子の下位尺度間の相関が $r=.41$ と高かった。クラスター分析を行うにあたり2つの尺度がクラスターの構成に過度に影響することを避けるため1つの下位尺度に集約し、①「自己志向的動機の重視」（自己志向的動機）、②「他者を喜ばせることの自己目的化」（他者志向的動機）、③「他者志向的動機の否定的側面の認知」（否定的認知）、④「他者からの期待・評価・承認の重視」（評価重視）、と命名した。この4つの下位尺度の得点に基づきウォード法によるクラスター分析を行った。その結果、研究参加者を4つのクラスターに分類した。各群は尺度得点の平均値の特徴に基づき、①他者評価を気にかけず他者志向的動機も低く、他者が動機づけに重要な役割を果たしていない「独立的自己志向的動機群」、②他者評価を気にせず他者志向的動機は高い「自律的他者志向的動機群」、③他者評価を重視し他者志向的動機が高いが、他者志向的動機を否定的に認知する「互惠的他者志向動機群」、④他者評価に対する関心が高く、他者志向的動機より自己志向的動機を重視している「葛藤的自己志向的動機群」と解釈された。

続く研究2では、大学生154名に同じ尺度を実施し、探索的因子分析によって研究1より少ない3因子解を採用した。因子名は①「他者の期待に応えることの自己目的化」（他者志向的動機）、②「他者志向的動機の否定

表1 伊藤（2007b）の各群の人数と下位尺度得点の平均値および標準偏差

クラスター	人数	研究1				研究2				
		自己志向的動機	他者志向的動機	否定的認知	評価重視	人数	自己志向的動機	他者志向的動機	否定的認知	
独立的自己志向的動機群	45	M SD	2.31 0.66	2.51 0.50	2.37 0.54	2.19 0.35	37	2.44 0.50	2.51 0.57	1.89 0.37
自律的他者志向的動機群	33	M SD	2.39 0.54	3.52 0.38	2.14 0.76	2.18 0.42	39	1.80 0.38	2.94 0.34	2.41 0.46
互惠的他者志向的動機群	41	M SD	1.76 0.44	3.57 0.29	2.68 0.71	3.02 0.32	27	2.19 0.38	3.36 0.24	3.21 0.47
葛藤的自己志向的動機群	41	M SD	2.70 0.53	2.85 0.52	2.80 0.51	3.04 0.31	40	3.08 0.43	2.69 0.54	2.91 0.45

他者志向的達成動機と自己志向的達成動機の関係性に対するパーソン志向的アプローチ（伊藤）の側面の認知」（否定的認知）、③「自己志向的動機の重視」（自己志向的動機）であり、これらの下位尺度得点に基づきウォード法によるクラスター分析を行い、4つのクラスターに分類した。下位尺度の平均値のパターンから研究1とある程度共通した群が構成されたとして、ここでも同様の命名がなされた（表1）。

上記のクラスター分析の結果に共通する点に着目すると、いずれの4群ともほぼ等しく人数が分布し大きな偏りは見られない。また用いられた下位尺度が異なるが、(1) 達成場面で他者志向的な動機づけを示す傾向と、(2) 他者志向的動機に対する否定的な認知を有する傾向、の高さの組み合わせによって解釈が可能である。「自律的他者志向的動機群」は、高・他者志向／低・否定的認知であり、安定した他者志向的な達成動機づけを示す。「互恵的他者志向的動機群」は、高・他者志向／高・否定的認知であり、他者志向的な達成に対してアンビバレントな態度が認められる。「葛藤的自己志向的動機群」は、低・他者志向／高・否定的認知であり、他者志向的な達成動機づけに顕著に否定的に反応している。最後の「独立的自己志向的動機群」は、低・他者志向／低・否定的認知であり、そもそも他者の存在が達成場面で重視されていない。なお自己志向的動機のパターンは2つの研究で若干異なる。研究1では「互恵的他者志向的動機群」が他の群と比較して自己志向的動機が最も低く、最も高い他者志向的動機と対照的である。研究2では「自律的他者志向的動機群」が自己志向的動機が最も低く、他者志向的動機は高くはない。「葛藤的自己志向的動機群」で自己志向的動機が最も高いこと、「独立的自己志向的動機群」は自己志向的動機は中程度であることは共通している。このように自己志向的動機と他者志向的動機の関係は4群間で明確ではない。

伊藤（2007c）は236名の大学生を対象に同じ短縮版を実施し、因子分析の結果3因子解に基づく下位尺度（自己志向的動機、他者志向的動機、他者志向的動機への否定的認知）の得点に基づいてウォード法によるクラスター分析を行った結果、6つのクラスターに分類した。結果は表2の通

他者志向的達成動機と自己志向的達成動機の関係性に対するパーソン志向的アプローチ（伊藤）

りであった。1群と4群は分類された人数が多く平均的な群と考えられる。1群は3尺度得点が平均的ないしやや低いに対して、4群は3尺度得点がやや高い。自己志向的動機が低く他者志向的動機が高い2群と3群では、2群が他者志向的動機の否定的認知が低く、3群が否定的認知がもっとも高い。また自己志向的動機が高い5群と6群では、6群は他者志向的動機が最も低く否定的認知はやや高いに対して、5群は否定的認知が最も低い。

表2 伊藤（2007c）の各群の人数と下位尺度得点の平均値および標準偏差

クラスター		自己志向的動機	他者志向的動機	否定的認知
1群	M	2.23	2.64	2.50
73名	SD	0.47	0.34	0.35
2群	M	1.89	3.38	2.34
38名	SD	0.31	0.24	0.39
3群	M	1.74	3.01	3.46
23名	SD	0.42	0.65	0.33
4群	M	2.91	3.25	3.11
57名	SD	0.46	0.30	0.38
5群	M	3.13	2.76	1.74
23名	SD	0.61	0.35	0.31
6群	M	3.59	2.16	2.73
22名	SD	0.40	0.41	0.56

本研究の目的

このように3つの異なる大学生サンプルを用いたクラスター分析の結果は、使用された下位尺度項目およびクラスター数で異なるものの共通する部分がある。(1) 他者志向的達成動機の高・低と(2) 他者志向的達成への肯定・否定の認知の2つの軸はクラスターを解釈する際には重要であると考えられる。これに(3) 自己志向的達成動機の高・低が加味される。一方で、クラスター分析によるクラスターはサンプルに大きく依存するとともに、クラスターの数の決定は研究者の主観的解釈によるところが大きい。研究間で全く同じクラスターが抽出されることを期待することが難しいという問題に対して、近年分析手法として採用されることが多い潜在カテゴリー分析では、クラスター数の異なるモデル間を比較することで、妥当なクラスターの数を推定することが可能である。

他者志向的達成動機と自己志向的達成動機の関係性に対するパーソン志向的アプローチ（伊藤）

Niemivirta, Pulkka, Tapola, & Tuominen (2019) は動機づけの達成目標研究においてパーソン志向的アプローチについてレビューしている。達成目標の研究ではマスタリー目標（学習目標）とパフォーマンス目標（遂行目標）という2つの目標の概念化とそれを測定する尺度の開発を中心に展開してきた。マスタリー目標とパフォーマンス目標（あるいはこれを元に拡張された複数の目標）のどれがどの程度、学習行動や学業成績を予測するのかを相関や重回帰分析を用いて検討する方法が一般的に採用されている。Niemivirta et al. (2019) はこれを変数志向的アプローチと呼んでいる。これとは対照的に変数を通しての個人の異質性、変数パターンの安定性と変化を検討する研究をパーソン志向的アプローチと呼んでいる。達成目標に対してパーソン志向的アプローチを採用した、小学生から大学生までを対象とする1991年以降の70の研究をレビューし、使用された変数や分類法、クラスターの数と内容についてまとめている。分類方法としては、クラスター分析がほぼ半分をしめるものの、2006年以降モデルに基づく方法（潜在カテゴリー分析が含まれる）の採用が増加している。クラスターの数は3か4でなされる研究が多いが、研究間で概ね共通して認められる6つのクラスターの特徴を確認している。これによると、マスタリー目標を志向する学生と、マスタリー目標とパフォーマンス目標の両方を志向する学生は共に遂行に優れているが、後者は最も成績が良いと同時に不安やストレスを経験する傾向があること、またパフォーマンス目標を志向する学生はこの2群よりも成績が低いが、2つの目標の双方が低い学生よりも適応的であること、が明らかにされた。この分析は学習場面で追求される複数の目標を扱う立場とも一致する。変数志向的アプローチでは一般に「マスタリー目標」と比較して「パフォーマンス目標」の不適応性が強調されるが、パーソン志向的アプローチでは2つの目標の関係性を扱うことの重要性が指摘される。

先述したように、努力を「自分のため」でも「他者のため」でもあったと回顧的に捉える大学生が少なからず存在していた（伊藤, 2007a）。これ

他者志向的達成動機と自己志向的達成動機の関係性に対するパーソン志向的アプローチ（伊藤）

は自己・他者志向的達成動機への態度尺度の下位尺度の「自己・他者志向的動機の統合」に対応している。2つの達成への志向性を2項対立的に捉えるなら、「自分のため」に努力するのか、それとも「周りの人のため」に努力するのか、ということになるが、大学生を対象とした面接調査でも、イチロー選手が引退会見で語ったような、「自分のため」に努力することが「周りの人のため」にもなっていたという経験や「周りの人のため」に努力することが自分の喜びでもあり動機づけになるという意識、あるいは「自分のため」か「周りの人のため」か区別できないという説明、が報告されている（伊藤, 2009a）。このような自己志向的にも他者志向的にも達成行動に従事する人の特徴を明らかにするためには、パーソン志向的アプローチを採用することが有効であろう。

そこで本研究は、自己・他者志向的達成動機への態度尺度（改訂版）について階層的なクラスター分析と潜在カテゴリー分析を実施することで、先行研究で示唆された4ないし6のクラスターに対して、その数と内容が再現されるかどうかを確認し、クラスターの設定の妥当性を検討することを目的とする。

方法

研究参加者 東京都内の大学生 294 名（男性 70 名、女性 219 名、未記入 5 名；平均年齢 18.8 歳）。

質問紙 自己・他者志向的達成動機への態度尺度（改訂版）（伊藤他, 2012；付録参照）を4件法（まったくあてはまらない、あまりあてはまらない、少しあてはまる、とてもあてはまる）で回答させた。この尺度は5つの下位尺度各5項目によって構成されている。この他に性別、年齢等についての質問項目が含まれていた。

手続き 2017年度および2019年度に開講された同一名称の教養科目の授業において、その時間の一部を用いて実施された。実施の際は、回答は無

他者志向的達成動機と自己志向的達成動機の関係性に対するパーソン志向的アプローチ（伊藤）

記名で個人は特定されないこと、成績とは関係のないこと、回答は自由意思に基づくこと、担当者の研究以外の目的で使用しないことが伝えられた。

結果

一部の項目に回答していない質問紙および回答に対する態度に疑念が考えられた質問紙（ほぼすべての項目に同じ選択肢を選択しているものなど）は分析から除外した（上記の研究参加者はこのスクリーニングによって残された質問紙による）。

因子分析による自己・他者志向的達成動機への態度尺度の構造の確認

自己・他者志向的達成動機への態度尺度について確認的因子分析を行った。分析には Amos22 を使用した。5つの潜在因子からそれぞれ5項目にパスを引き、またすべての潜在因子間に共分散を仮定した。適合度指標は、 $\chi^2(265) = 585.52$ 、GFI=0.86、AGFI=0.83、RMSEA=0.064 であり、十分な値とは言えなかった。そこで潜在因子から項目へのパス係数が 0.45 に満たない、項目 9（「自己志向的動機の重視（以下、自己志向的動機）」の項目）、項目 3 と項目 18（いずれも「他者志向的動機の重視（以下、他

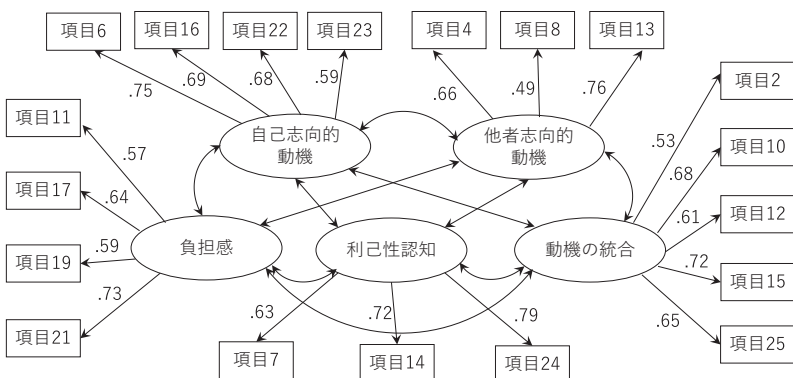


図1 確認的因子分析の結果

他者志向的達成動機と自己志向的達成動機の関係性に対するパーソン志向的アプローチ（伊藤
者志向的動機）」の項目）、項目1（「他者志向的動機への負担感（以下、
負担感）」の項目）、項目5と項目20（いずれも「他者志向的動機の利己
性の認知（以下、利己性認知）」の項目）の計6項目を削除した。その結
果、適合度指標は、 $\chi^2(142) = 337.67$ 、 $GFI = 0.89$ 、 $AGFI = 0.86$ 、
 $RMSEA = 0.069$ となり、十分とは言えなかった*1。

潜在変数間の相関係数の

表3 潜在変数間の相関推定値

推定値は表3の通りであっ
た。「負担感」と「自己・
他者志向的動機の統合（以
下、動機の統合）」($r = .76$)、
「負担感」と「利己性認知」
($r = .69$)、「利己性認知」
と「動機の統合」($r = .50$)

	他者志向 的動機	負担感	利己性 認知	動機の 統合
自己志向 的動機	-.55	.35	.08	-.38
他者志向 的動機		.17	.25	.76
負担感			.69	.39
利己性認 知				.50

に高い正の相関、「自己志向的動機」と「他者志向的動機」に高い負の相
関 ($r = -.55$) が推定された。

確認的因子分析の結果に基づいて、最終的に「自己志向的動機の重視」
4項目、「他者志向的動機の重視」3項目、「他者志向的動機への負担感」4
項目、「他者志向的動機の利己性の認知」3項目、「自己・他者志向的動機
の統合」5項目、の計19項目を下位尺度項目として採用し、下位尺度に
含まれる項目の平均値を下位尺度得点とした。各 α 係数はそれぞれ
.77、.68、.72、.76、.77であった。

クラスター分析による回答者の分類

本論文の目的は従来の階層的クラスター分析と混合分布モデルによる潜

1) 最尤法、プロマックス回転による探索的因子分析を行ったところ、固有値は、5.02、4.23、1.50、1.35、1.18、0.97と変化しており、減衰状況と固有値1.0以上という観点から5因子解を採用することは妥当と考えられた。各5因子に最も負荷量の高い項目群が尺度作成時に想定した下位尺度項目とほぼ対応することが確認された。項目4と項目19のみ当初想定した因子とは異なる因子に対して負荷量が高かった（付録参照）。

他者志向的達成動機と自己志向的達成動機の関係性に対するパーソン志向的アプローチ（伊藤）
在カテゴリー分析の結果を比較しながら、妥当なクラスターを検討することにある。分析にあたっては、フリーソフトである HAD16（清水, 2016）を用いた。

まず5つの下位尺度得点を標準化して、ウォード法による階層的クラスター分析を行った。デンドログラム（図2）を参照し、4クラスターもしくは6クラスターを採用するのが適当と判断した。各クラスターに含まれる人数と5つの下位尺度標準得点の平均値は表4と図3、図4の通りであった。4クラスターの場合、第1クラスターは他者志向的動機の重視が低く、他の尺度は自己志向的動機の重視がやや高いもののほぼ平均的であり、自己志向的に達成に動機づけられる平均的な群と考えられる。第2クラスターは29名と少なく、自己志向的動機の重視のみが高く、他者志向的達成動機と関連する4変数はすべて低いため、達成状況において他者が考慮されることはなく自己志向的に達成に動機づけられる群と考えられる。第3クラスターは自己志向的動機の重視が低く、他者志向的動機に対する負担感や利己性の認知も生じていないが、他者志向的動機の重視と2つの動機の統合は平均に近いため、他者志向的に達成に動機づけられる平均的な群と考えられる。第4クラスターは他者志向的動機の重視と自己・他者志向的動機の統合が最も高いが、他者志向的達成動機に対する負担感や利己性の認知も高いという他者志向的な達成に対するアンビバレントさが認められる群である。

6クラスターの場合、4クラスターの第1クラスターと第4クラスターがそれぞれ2つのクラスターに新たに分かれることになった。6クラスターの場合の第1クラスターは他者志向的動機の重視と自己・他者志向的動機の統合がやや低いものの全体としては平均的であり、4クラスターの第1クラスターとして特徴づけた自己志向的に達成に動機づけられる平均的な群を表している。これと分離した第2クラスターは22名と少なく、自己志向的動機を非常に重視し、他者志向的動機を非常に軽視している。また他者志向的動機に負担感や利己性を強く認識している点が、第3クラス



図2 階層的クラスター分析によるデンドログラム
(上位25のクラスター)

成に対してアンビ

機づけられる傾向が最も強く負担感や利己性の認知が低い。第6クラスターは他者志向的動機と自己志向的動機の双方がやや高く、自己・他者志向

表4 階層的クラスター分析による各クラスターの下位尺度標準得点

クラスター	所属人数	自己志向的動機	他者志向的動機	負担感	利己性認知	動機の統合
1	83	0.40	-0.80	0.33	0.26	-0.38
2	29	0.88	-1.06	-0.93	-1.28	-1.83
3	75	-0.82	0.20	-0.90	-0.71	0.22
4	107	0.03	0.77	0.63	0.65	0.63
1	61	0.09	-0.62	0.02	0.05	-0.34
2	22	1.24	-1.31	1.18	0.83	-0.47
3	29	0.88	-1.06	-0.93	-1.28	-1.83
4	75	-0.82	0.20	-0.90	-0.71	0.22
5	57	-0.30	1.19	0.30	0.27	0.64
6	50	0.40	0.29	1.01	1.08	0.63

他者志向的達成動機と自己志向的達成動機の関係性に対するパーソン志向的アプローチ（伊藤）

的動機の統合も高いため、第2クラスターと同様に他者志向的動機の負担感や利己性の認知が非常に高いながらも2つの動機を保持する群と考えられる。

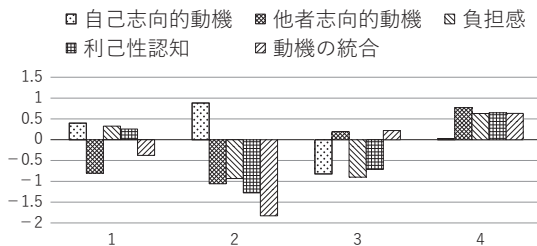


図3 各クラスターの下位尺度標準得点の平均値（4クラスター）

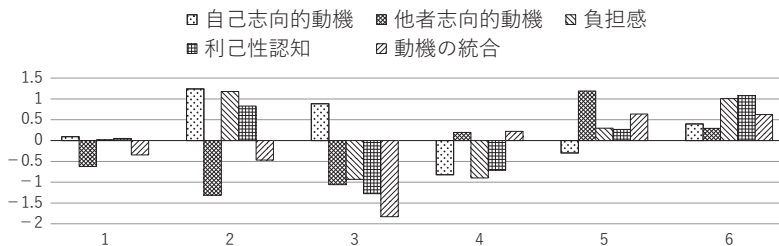


図4 各クラスターの下位尺度標準得点の平均値（6クラスター）

潜在カテゴリー分析では、あらかじめカテゴリー（クラスター）の数を仮定したモデルに基づいて分析を行い、適合度を比較することで妥当なカテゴリー数を決定することができる。クラスターにおける5つの下位尺度の分散がクラスターで異なると仮定するモデルを採用した。クラスター数

表5 潜在クラスター分析による適合度

クラスター数	AIC	BIC	SBIC
3	2362.19	2480.07	2378.58
4	2280.77	2439.17	2302.80
5	2238.67	2437.58	2266.33
6	2260.67	2500.10	2293.97
7	2282.67	2562.62	2321.61

他者志向的達成動機と自己志向的達成動機の関係性に対するパーソン志向的アプローチ（伊藤）は3～7の値で設定し適合度指標を比較した。その結果、いずれの適合度指標もクラスター数が5のときに最もあてはまりがよいことを示していた（表5）。

各クラスターにおける下位尺度標準得点の平均値は表6および図5に示す通りであった。第1クラスターは他者志向的動機が低い傾向があるものの、全体として下位尺度得点が平均的であるため、他者志向的に達成に動機づけられない平均群と考えられる。第2クラスターは自己志向的動機が高く他者志向的動機に関する他の下位尺度得点は軒並み低い値となっているため、他者を考慮することなく自己志向的に達成に動機づけられる群であった。このクラスターは含まれる参加者の数も27名と最も少ない。第3クラスターは他者志向的動機の負担感や利己性を強く認知しており、自己志向的動機が高く、他者志向的動機も平均的で2つの動機の統合的視点も保持していた。第4クラスターは第2クラスターと同じように他者志向

表6 潜在カテゴリー分析による各クラスターの下位尺度得点の平均値

クラスター	人数	自己志向的動機	他者志向的動機	負担感	利己性認知	動機の統合
1	69	0.22	-0.58	-0.03	-0.05	-0.34
2	27	0.77	-1.30	-0.95	-1.19	-1.93
3	59	0.58	-0.07	1.28	1.16	0.35
4	54	-0.78	0.26	-1.18	-1.03	0.15
5	85	-0.33	0.77	0.18	0.27	0.54

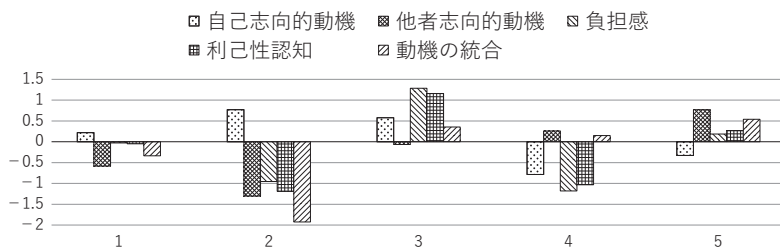


図5 潜在カテゴリー分析による各クラスターの下位尺度得点の平均値（5クラスター）

他者志向的達成動機と自己志向的達成動機の関係性に対するパーソン志向的アプローチ（伊藤）的動機の負担感や利己性を認知していないが、第2クラスターとは対照的に自己志向的動機が低く、他者志向的動機がやや高い。第5クラスターは他者志向的動機と2つの動機の統合が5つの中で最も高く、その他は平均的であるため、他者志向的に達成に動機づけられている群と考えられる。

考察

本論文では、自己・他者志向的達成動機への態度尺度について階層的なクラスター分析と潜在カテゴリー分析により回答者の群分けを行い、その内容を比較することで、クラスターの設定の妥当性を検討し、他者志向的達成動機のあり方、特に自己志向的動機との関係づけ方を探ることを目的とした。

探索的因子分析の結果は作成時に想定した5因子を支持するものであったが、確認的因子分析の結果は十分な適合度を得られなかった。また「他者志向的動機」と「動機の統合」の間に、.76の相関が推測されたが、これは質問文で「勉強やスポーツ、芸術活動など、あなたが集団の一員としてではなく個人として、ある目標を達成しようとして努力する場合を思い浮かべて下さい」と教示しているため、「自分のため」の達成行動が前提とされており、「周りの人のため」に達成に動機づけられる場合には必然的に2つの動機づけを同時に志向することになったと解釈できる。援助行動のように「周りの人のため」が前提となる状況では、自己志向的に動機づけられる傾向が2つの動機の統合と関連するかもしれない。また「負担感」と「利己性認知」の間にも、.69の相関が推測されたが、「負担感」は主に他者から感じられる義務感、負担感、プレッシャーの認知であり、「利己性認知」は周りの人からの評価懸念という他者志向的動機の利己的な理由の認識であり、いずれも他者志向的な達成動機づけを否定的に捉えるという点では高い相関もうなずける。ただし前者は他者志向的に達成行動に従事する人自身のネガティブな認知であるのに対して、後者は他者志

他者志向的達成動機と自己志向的達成動機の関係性に対するパーソン志向的アプローチ（伊藤）

向的に行動している他者に対するネガティブな認知である。どちらも他者志向的に動機づけられることを抑制する要因となりうるが、両者を区別しておく必要はあるだろう。例えば、他者志向的に達成に動機づけられていた経験を持つ人が、負担感が原因で自己志向的に動機づけられるようになり、その結果他者志向的な動機に利己性を認知するということがありうるように思われる。

クラスターの数という点では階層的クラスター分析が4ないし6、潜在カテゴリー分析が5と一致しないまでも、構成されたクラスターはかなり対応しており類似していた。図3と図4を比較すると、階層的クラスター分析（6クラスター）の第1クラスター、第3クラスター、第4クラスター、第5クラスターのプロファイルは潜在カテゴリー分析（5クラスター）の第1クラスター、第2クラスター、第4クラスター、第5クラスターにそれぞれ類似している。階層的クラスター分析（6クラスター）の第2クラスターと第6クラスターは当該の分析では近くに位置づけられていないが、負担感と利己性の認知という否定的な認知が高いという点で類似しており、潜在カテゴリー分析（5クラスター）の第3クラスターの特徴と対応する。よって今回得られたクラスター（プロフィール）は信頼性が高いと考えられる。階層的クラスター分析（6クラスター）の結果を用いるなら、他者志向的な平均群が第4クラスター、自己志向的な平均群が第1クラスターとした上で、自己志向的に動機づけられ他者志向的動機に否定的な第2クラスター、同じく自己志向的動機づけられ他者を考慮しない第3クラスター、他者志向的動機が高く2つの動機を統合している第5クラスター、他者志向的に動機づけられながら否定的な認知も高い第6クラスター、と特徴をまとめることができる。ちなみに下位尺度の項目が異なるため単純な比較はできないが、同じく6クラスターに分類した伊藤（2007c）の結果（表2）と比較すると、第1クラスターは1群、第2クラスターは6群、第3クラスターは5群は対応しているように思われる。

先に、他者志向的達成動機をめぐるクラスターは、(1) 他者志向的達成

他者志向的達成動機と自己志向的達成動機の関係性に対するパーソン志向的アプローチ（伊藤）
動機の高・低と（2）他者志向的達成への肯定・否定の認知の2つの軸に、
（3）自己志向的達成動機の高・低を加味して解釈できると述べた。これは
今回の潜在因子間の推定された相関を考慮すると自然な結果と考えられる
かもしれない。他者志向的達成動機と自己志向的達成動機は、2つの動機
が統合されていない場合には、対極にあるものとして捉えられるが、2つ
の動機が統合されている場合には双方がある程度の高さを示し、その中で
他者志向的達成動機を強調する場合と動機の統合を意識する場合があるよ
うに思われる。自己志向的達成動機の高い（他者志向的達成動機の低い）
群では、他者志向的達成動機を否定的に認知する場合と他者が問題になら
ない（そのため、他者志向的達成動機が否定的でない）場合がある。一方、
他者志向的達成動機と2つの動機の統合が高い群では、他者志向的達成動
機を否定的に認知するアンビバレントな場合とそうでない場合がある。こ
れ以外に中庸な平均的な群を構成するかどうかでクラスター数は4~6に
なると推察される。ただし研究によって他者志向的達成動機のみが非常に
高い群や否定的認知が非常に高い群が現れるなど、3変数の関係は自己志
向的達成動機が強い場合よりも明確ではないかもしれない。これは他者志
向的達成動機がその否定的な認知（特に負担感）と表裏の関係にあるため、
捉え方が変化しやすいことを表しているかもしれない（伊藤, 2009b）。今
後、さらに今回のクラスターの持つ特徴の再現性を確認するとともに、外
的な基準をもってクラスターの特徴について明らかにしていく必要がある。

引用文献

- 伊藤 忠弘（2004）. 達成行動における「他者志向的動機」の役割 帝京大学心理
学紀要, 8, 63-89.
- 伊藤 忠弘（2005）. 他者志向的動機の概念的妥当性の検討—仮想的な返報場面に
おける反応との関連— 日本教育心理学会第47回総会発表論文集, 313.
- 伊藤 忠弘（2006）. 「最も努力した経験」における他者志向的動機の現れ方 帝京
大学心理学紀要, 10, 27-44.
- 伊藤 忠弘（2007a）. 自己・他者志向的動機の調整・統合過程への探索的研究
（5）—クラスター分析に基づく被験者の分類の妥当性の検討（2）— 社会心理

他者志向的達成動機と自己志向的達成動機の関係性に対するパーソン志向的アプローチ (伊藤)

学会第 48 回大会発表論文集, 664-665.

伊藤 忠弘 (2007b). 自己・他者志向的動機の調整・統合過程への探索的研究
— クラスター分析に基づく被験者の分類 — 帝京大学心理学紀要, 11, 87-10.

伊藤 忠弘 (2007c). 自己・他者志向的動機の調整・統合過程への探索的研究 (3)
— クラスター分析に基づく被験者の分類と対人関係への態度の関係 (2) — 日
本教育心理学会第 49 回大会発表論文集, 39.

伊藤 忠弘 (2009a). 重要な他者からの期待や葛藤経験と努力の理由づけとの関
係—他者志向的動機づけを規定する他者との関係性の検討— 日本社会心理学会
第 50 回大会・日本グループダイナミクス学会第 56 回大会合同大会発表論文
集, 62-63.

伊藤 忠弘 (2009b). 達成行動における他者志向的動機概念の再検討 学習院
大学文学部研究年報, 55, 217-235.

伊藤 忠弘・藤井 勉・大家 まゆみ・上淵 寿 (2012). 養育態度・親の期待・他者
志向的達成動機の日韓比較 日本社会心理学会第 53 回大会発表論文集, 75.

真島 真里 (1995). 学習動機づけと「自己概念」 東洋 (編) 現代のエスプリ 333
意欲 やる気と生きがい (pp. 123-137) 至文堂

Niemivirta, M., Pulkka, A., Tapola, A., & Tuominen, H. (2019). Achievement
goal orientations: A person-oriented approach. In K. A. Renninger, & S. E.
Hidi (Eds.), *The Cambridge Handbook of Motivation and Learning* (pp. 566
-616). (Cambridge Handbooks in Psychology). Cambridge, UK: Cambridge
University Press.

日本スポーツ企画出版社 (2019). Slugger 増刊 イチロー引退特集号 2001-
2019MLB 全軌跡

清水 裕士 (2016). フリーの統計ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研
究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1,
59-73.

外山 美樹 (2011). 行動を起こし、持続する力 モチベーションの心理学 新曜
社

付録 自己・他者志向的達成動機への態度尺度（改訂版）の下位尺度項目

項目番号	項目	想定された下位尺度	確認的因子分析による項目	探索的因子分析による項目
1	周りの人のためにがんばると、義務感と見返りを期待する気持ちがうまれる	負担感		負担感
2	周りの人のためにがんばっても、その人が喜んでくれることが、結局は自分の満足感につながる	動機の統合	動機の統合	動機の統合
3	自分の満足感のためだけにひたすら一つのことを打ち込んでいる人は、孤独だと思う	他者志向		他者志向
4	やる気が下がったときに、「周りの人のため」を支えにすることがある	他者志向	他者志向	動機の統合
5	親や先生のためにがんばるのは、彼らを喜ばせる自分を好ましく考えているにすぎない	利己性認知		利己性認知
6	「自分のため」でないとやる気を高くもつことはむずかしい	自己志向	自己志向	自己志向
7	「周りの人のためにがんばる」という言葉には、周りの人にとって自分が意味ある存在であることを確認したいという気持ちがある	利己性認知	利己性認知	利己性認知
8	「周りの人のためにがんばっている」と思うことによって、甘えがなくなると思う	他者志向	他者志向	他者志向
9	「周りの人のため」は目的ではなく、良い結果が出た後についてくれるだけである	自己志向		自己志向
10	周りの人が喜ぶことで自分の存在意義を感じることがある	動機の統合	動機の統合	動機の統合
11	周りの人のためにがんばると、結果がでないとき「申し訳ない」と思ってしまい負担である	負担感	負担感	負担感
12	「周りの人のため」は「周りの人が喜ぶと自分もうれしいからがんばる」ということである	動機の統合	動機の統合	動機の統合
13	「周りの人のために」という方ががんばりやすい	他者志向	他者志向	他者志向
14	周りの人のためにがんばることは、「人からよく思われたい」という思いにつながっている	利己性認知	利己性認知	利己性認知
15	周りの人のためにがんばると、心の底から喜びが生まれる	動機の統合	動機の統合	動機の統合
16	「自分のため」を優先にした方がいいと思う	自己志向	自己志向	自己志向
17	周りの人のためにがんばることは見返りも大きいがりスクも高い	負担感	負担感	負担感
18	最終的には「周りの人のため」の方が高い成果を得られると思う	他者志向		他者志向
19	周りの人のためにがんばると、周りの人の期待がなくなったとき、やる気がうせてしまう	負担感	負担感	利己性認知
20	「周りの人のためにがんばる」といっても、それは自己満足のように感じる	利己性認知		利己性認知
21	周りの人のためにがんばると、「失敗できない」という大きなプレッシャーがかかる	負担感	負担感	負担感
22	自分のためにがんばるといいうり方でなければ自分を向上させられない	自己志向	自己志向	自己志向
23	「周りの人」はあくまで支えであり、目的にはならない	自己志向	自己志向	自己志向
24	周りの人のためにがんばることは、自分を人に認めてほしいということである	利己性認知	利己性認知	利己性認知
25	応援してくれる人のためにがんばるのは、その人の喜ぶ顔やしぐさが見たいからである	動機の統合	動機の統合	動機の統合

注) 自己志向：自己志向的動機の重視 他者志向：他者志向的動機の重視 負担感：他者志向的動機の負担感
利己性認知：他者志向的動機の利己性の認知 動機の統合：自己・他者志向的動機の統合